

シン)は、この宿神と由緒を同じくするものとみられる。この神については柳田国男氏が早く明治43年(1910)初版刊行の『石神問答』(『定本柳田国男集』所収)において考察を加えている。柳田氏は、守公神を諸国に散見する守宮神・司空神・主宮神・四空神などと称する神と同じものとみて、これらはすべて宛字であって、もとはソコ(塞)の神、すなわち辺境の神という意味であると結論している。これらをソコの神とみることの当否はさておいても、その語源を一にするものであることは容易に推察できる。

筆者がこれまで研究のフィールドとしてきた南九州においても、宿神・守公神についての記載が中世の史料にしばしば見えている。まず、日向国では摂関家領の大庄園である島津庄の庄庁に伊勢神宮や春日社などと共に守公神社が奉祀されていたことが知られる。同様に、薩摩国では島津庄に属する伊作庄の庄庁に宿神社が奉祀されていた。大隅国では国府跡比定地に守君(公)神社が現存しており、戦国時代には国府の御神と称されていたことが判明している。また、同国一宮の正八幡宮(現鹿児島神宮)では公文所に守公神が祀られていた。

以上に示した例が、現在のところ中世の南九州において知られる宿神・守公神のすべてである。この四例に共通していることは、いずれも庄庁・国府・公文所などの庄園・公領・神領の行政機関に奉祀されている点である。この点に宿神・守公神に固有の性格を見出すことができる。つまり、宿神・守公神とは行政機関の守護神であり、いわば鎮守の神であって領内における政治の安穩を祈る神であったとみられる。その呼称は、以上に述べたような、行政機関に宿る神、あるいは公(おほやけ)を守る神という神としての特長に由来するものであろう。詮ずるところ、宿神・守公神とは、中世的な支配体制下における領域支配のための政治的守護神であり、かつ政治的組織そのものを守護(鎮守)するところの神であった。

全国的な規模で庄園の倒壊や国府の衰滅が進んだ中世末期において、そこに奉祀されていた宿神・守公神の信仰が急速に失なわれていったことは想像するに難くない。「神は人の敬により威を増し、人は神の徳により運を添う」との中世の願文にみえる文言は、まさに当時の人と神との関りを表している。

## 無心の笑み

藤 瀬 敬

先日、バスの中でのことである。所在なさに本を読んでいた私がふと顔をあげると、目の前に6、7か月くらいの色白のかわいらしい幼児が、じっとこちらを見つめ

ていた。あるいはその視線に私は顔をあげたのかも知れない。つい先ほどまではその席には老婦人が坐っていたのだが、さっきの停留場で若い母親とこの幼な児に代った

らしい。昨年生まれた2人目の外孫もちょうどこのくらいだと思うと急に親しみを感じて、私はにっこりと笑ってみせた。

ところがその幼児は何の反応も見せず、まばたきもしないで、まじまじと私を見つめているのである。それは人を見る目つきではない。何か今までに見たこともない珍しい不思議な動物をでも見るような目なのである。何とか反応をと思って、目を大きくあけたり舌を出してみたり頬をふくらませてみたりしたが駄目だった。

眠っている赤ちゃんをしげしげと見ていると、こんな小さなからだでも何もかも備え、その上大きな未来までも背負って生まれて来たことが、有り得ない不思議な感に打たれることがある。きっと昔の人はこの驚きにうたれて、幼な児の天真無邪気な顔を理想の表情として仏像に刻んで写したに違いない。幼な児はみほとけだから人間をあのような目で見るのかも知れない。

私の最初の孫（これも外孫）は今2歳前だが目が大きい。白目は青味をおびえて澄みきっているし、黒目は美しくいきいきと動く。何年か前マドリードの小学校を参観した時、1年生の子ども達の男の子も女の子も、青く澄んだ瞳の美しさに驚いたことがある。色白の肌と金髪に、その青い瞳の色が見事なコントラストをみせてまるで天使を見るような思いだった。しかしこの子達も成長発達につれて、やがて思春期に入るとあの澄みきった瞳の青さは次第に消え去るのだと言う。そう言えば日本の幼児に見られる青味をおびた白目の部分も、幼児期だけのものらしい。

みほとけに生まれて来てだんだんに汚れてゆき、最後にはちりあくたになるのが人生だとしたら、この順序はかなり辛い悲し

いことになる。

昨年の秋上京の折、南青山のI古美術店で中国の六朝仏を買った。店主は6世紀の北齊時代の黄花石の仏だと言う。一光三尊仏立像で全体の高さが22センチ、幅が12センチある。中尊の高さは13センチ、肉厚の蓮台の上に立っていて右手は施無畏印、左手は与願印を結んでいる。顔もからだもまるまるとした童子のような感じであるが、目も鼻もほとんど磨滅して定かではない。ふくよかな頬は円満福德で、かすかに笑みをたたえた口もとは深い内省内観を教えている。あどけないと思って見ていると、きりりとしまった謹厳荘重な精神を感じさせる。左右の菩薩は中尊よりやや低く、胸前にあげた手に蓮の蕾のようなものを持っているが、それが果たして何なのかはわからない。そして菩薩の足もとには2匹の獅子がこちらに顔を向けて蹲っている。この三尊を抱くように舟形光背があるが上部は欠けているし、左側の菩薩の顔も欠損したのを補修してある。これが完品ならばすばらしいがそれだととても私などの手に入るような価格ではあるまい。満身創痍に近いからこそ入手できたのである。

その後北齊仏・北周仏について調べてみたが、この石仏はどうも北周のものらしい。中国陝西省の特産品である黄花石材でもって造られた仏像は、北魏にほとんどなく、西魏において僅かに見られるが最も多いのは北周時代らしい。それは北齊における白玉像（白大理石像）に拮抗するように、北周時代に最も盛行をみたという。その材料の制限から黄花石像はおよそ大きなものは少なく、大部分は2,30センチ程度の小像だという。その玉質のもつ底光りする落ちついた輝きは貴重なものであっただろう

し、北周人がこの世のみでなく、あの世までもまた頼む仏への本願を、世にも貴重とされた黄花岗に刻んだのは当然の姿であったのかも知れない。

この上京の半月程前、家内を連れて大阪市立美術館で開催されていた山口コレクション中国石仏展を見て来た。そこには大は1.7メートルから小は10センチにも満たないものまで、約70点の石仏が陳列されていた。それは北魏の5世紀半ばの頃から東魏・西魏・北齊・北周・隋・唐にわたる約240年間のもので、石材も砂岩・石灰岩・凝炭岩・白玉石・黄花岗と多種であった。

北魏から東魏・西魏とその推移を見ながら、私はそこにわが飛鳥仏の源流を見る思いがした。と同時に私には、精神性から見ると時代をさかのぼるほどそれが充実しており、隋も後半になると技術がやや邪魔になるし、唐になるとリアルであるが故にそれが精神性を邪魔しているときえ思われたのである。だから私の好きな石仏は隋には1点のみでそれ以前のものの中に沢山あった。そこには幼な児のような天真無垢な童顔が、そして無心の笑みがあった。これと同じことをかつてルーブル美術館のギリシャ彫刻でも体験したのであるが、アルカイック期の彫刻の中に、足がその場に釘づけされて動けなくなるような、深い感動に茫然自失するような思いをしたのであった。そしてその大理石像にもかすかな笑みがあった。

無心のかすかな笑みといえば上野の東京

博物館の中にある法隆寺献納宝物館に収蔵されている四十八体仏にもこれがある。東大寺正倉院の宝物よりも更に古い飛鳥・白鳳期の小金銅仏である。2.30センチほどの小仏像だが、あのすばらしい魅力にとりつかれると大平仏とは何なく見おとりがしてしまう。技術はすばらしいし洗練されているのだが、私にはその豊満華麗さが内面的な精神の緊張を奪っているように思われるのである。

それにしても幼児は未分化であるが故に、無心、奔放に美的真実を何の疑いももたずに表現する。しかし7.8歳になると保存思考がはじまり、9歳になれば夢の世界や原始心性から次第に脱却する。知的発達に伴って論理的思考の時代に入るとともに、描画においても実際に見えるように描きたいと写実を志向する。美的真実よりも皮相的写実に満足感を覚えるようになるのである。もちろんこの時代にも教師の創意工夫によってよりよい指導が求められようが、もはや幼児期のあの無心の美に還ることはできない。

このように考えてくると私は、何だか幼児期が六朝や飛鳥・白鳳仏の時代であり、小学校中学年以上は隋・唐や天平仏・平安仏の時代のようにさえ思われてくるのである。ここでは一つのものが死んで別の何かが生まれたのであり、もともと「発達」とはこのようにして成り立つものかも知れない。